



みのる法律事務所便り  
第 2 7 1 号  
平成 2 4 年 1 1 月

みのる法律事務所  
弁護士 千田 實

〒 021-0853

岩手県一関市字相去 57 番地 5

TEL : 0191-23-8960

FAX : 0191-23-8950



みのる法律事務所 <http://www.minoru-law.com/> [✉ minoru@minoru-law.com](mailto:minoru@minoru-law.com)

## 熟年離婚



「熟年」とは、広辞苑には「人生の経験を積み、円熟した年ごろ。老年の前に当たり、中高年に相当」と書いてあります。ここでは中高年を指すことにします。

私共の事務所に相談にみえる方の中で、数の上で一番多いのは離婚事件です。その中でも、最近中高年の方が多くなったような気がします。

元々、生まれも育ちも違う男女がちょっとしたきっかけで生活を共にするわけですが、何から何まで気に入るわけがないことは当然のことです。長く生活を共にしてくると、相手の悪いところも出てきます。20～40年ぐらい生活を共にしてきた熟年夫婦に、離婚問題が出てくることは不思議でない気がします。

お互いに若くて新鮮さを感じたり、異性としての魅力を感じたりしている間は、欠点もあまり気にならずに過ごすことができます。

「夫婦喧嘩は犬も食わぬ」という<sup>げんか</sup> 諺<sup>ことわざ</sup>があります。似たような諺に「夫婦喧嘩は止めてはならぬ。一夜明ければすぐなおる」とか、「夫婦喧嘩は寝てなおる」などというものがあります。

若い頃は異性であることに<sup>あこが</sup> 憧れを覚え、肉体関係によって強く結ばれ、それによって喧嘩もおさまったり、相手の欠点も隠れてしまうということが多いと思

黄色い本、いなべんの本は、有限会社エムジェエムの他、下記書店でも好評発売中です。

宮脇書店気仙沼本郷店 〒988-0042 気仙沼市本郷 7-8 TEL: 0226-21-4800  
[amazon.co.jp](http://www.amazon.co.jp/) <http://www.amazon.co.jp/> ~送料無料~

います。

しかし、中高年になってきますと、互いに異性としての新鮮さや魅力はだんだん薄れてくることは間違いないと思います。肉体関係も薄くなります。そうなっ  
てきますと、異性としての魅力や肉体関係を以て、互いの欠点を包み隠すという  
ことができなくなって参ります。ベールが取られますから、互いの欠点が露骨に  
見えてしまうことになります。

中高年の離婚問題に関与していますと、そんな思いを強くすることがあります。

こう考えてみると、これは当たり前というか、自然なことなのだと思います。  
中高年夫婦には、そういう当たり前のことが問題の根底に流れており、離婚まで  
考えるようになってきているのだ、と考えられるケースが多くあります。

私達夫婦も、結婚して30年を優に超え、離婚相談に来る中高年の皆様と同じ  
ような思いを味わっています。今回は、「中高年夫婦は、どのようにしたら離婚  
問題などに遭<sup>あ</sup>わないで済むか」ということを、多くの事例を参考にして述べてみ  
たいと思います。中高年夫婦の危機脱出のノウハウです。

しかし、これは私の独断と偏見によるものですから、どの夫婦にも当てはまる  
とは考えていません。「そういうこともあるんだな」という程度に受け取ってい  
ただければ幸いです。そして、「こういうところは気をつけなければ」と心の隅  
にでも置いていただければ、どこかでお役に立つこともあるのではないかと  
思います。

思いつくまま、中高年夫婦が離婚を考えるに至った過程の中で、特にそれがき  
っかけとなり、溝が深まったと思われる点を拾い上げてみます。思いつくま  
までですので、理論的に整理されていないことは当然ですが、思い違いをしていたり、  
思い落としをしているところもたくさんあると思います。いつか事務局にでも整  
理してもらい、1冊にまとめたいと思いますが、今回は取り敢<sup>あ</sup>えず私の頭に浮か  
んだものを述べさせていただきます。

これから述べることを反面教師にしていただき、中高年夫婦に末永く上手くや



っていただきたいとの思いで、離婚まで考える原因になったと思える事柄を順不同に述べさせていただきます。いずれも、ちょっとしたボタンの掛け違いがどんどん拡大し、のっぴきならない事態にまで進行していくように思われますので、ここでも「早期発見、早期治療」が大事だと思います。早期発見のため、ここで述べるのが役立ってくれば幸甚です。

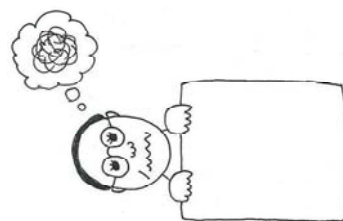
### (1) 寝室を別にした

「夫のいびきがうるさくて、熟睡ができない」と言って、寝室を別になさる中高年の奥さんは少なくないようです。中高年になって夫のいびきが大きくなったということはあるかもしれません。そこで、中高年になって寝室を別にする奥さんが多くなるのではないかと思います。このことは、男の身である私も「そうなのではないか」という不安が湧いてきます。ですが、いびきをかいている本人は、自分のいびきは気づかないものですよね。

確かに年を取ってくると、互いに相手に異性を感じるよりは、「静かに寝たい」という思いが湧いてきます。それだけ体力が落ちるからだと思います。ですから、年を重ねるに連れ、「寝室を別にした」と思うのも無理からぬ場合もあると思います。そういう思いも、よく理解できる気はします。

しかし、夫婦が中高年になってから寝室を別にするには、いかがなものでしょうか。いびきが大きくなっているということは、年齢を重ね、体調が変化していることの現れではないでしょうか。つまり、体調が悪くなっているという不安材料でもありそうです。寝室を別にしていて、夜中に夫に急激な体調変化が現れた場合、誰が対応してくれるのでしょうか。救急車を呼ばなければならないような状況にあっても、その手配ができないということにもなりかねないと思います。布団やベッドは少し離してもよいと思いますが、寝室は一緒にすべきではなからうかと私は思います。

「寝室を別にした」ということが直接の離婚原因とはなっていないまでも、その



ことがきっかけとなり、徐々に夫婦の絆が離れていくということはあるようです。それがきっかけとなり、一緒に行動することも少なくなったり、会話も少なくなったりということにつながり、ついには心が離れていくことがあるような気がします。寝室を一緒にする意味は、若い時と中高年とでは違ってくるのではないのでしょうか。しかし、その意味、目的が違っても、『夫婦の絆』にとって大事なことだと思います。因みに、「絆」とは、人と人との間の、断ち切ることのできない結びつき、または結びつけているものだそうです。

## (2) 一緒に行動することが少なくなった

中高年になってきて、夫は夫の趣味、妻は妻の趣味、夫は夫の友人、妻は妻の友人というようなことで、夫婦で一緒に行動することが少なくなっている方が少なからず見受けられます。夫は、ゴルフだったり、盆栽だったり、キノコ採りだったり、釣りだったりという趣味にはまりこみ、妻は、映画鑑賞だったり、観劇だったり、パッチワークを楽しんだりと、それぞれ一緒にやるのが難しい趣味を持つようになっていきます。友人も、夫は飲み友達、妻は旅行友達などと、異なる世界でのお付き合いが多くなっていきます。

だんだん趣味や友人が違ってくると、夫婦で一緒に行動することが少なくなります。夫婦で一緒に旅行しようなどということも少なくなり、それぞれ別々の仲間と旅行をしたりするようになります。寝室を別にし、行動を別にし、旅行を別々にするようになったら、徐々に相手の存在が小さい存在となり、行き着くところは不要な存在ということになりかねないのです。

私は、中高年になったら、せめて泊まり掛けの旅行は夫婦一緒にすべきだと思います。旅行先で何が起きるかわからないのです。特に、中高年になれば持病も持つことになります。互いに相手の存在は不可欠となっています。別々に宿泊することは極力避けるべきことだと思います。

泊まり掛けの旅行を別々にすることは、やむを得ない場合を除き、すべきでな



と思います。夫婦というものは、そういうものではないでしょうか。それが、夫婦の絆ではないでしょうか。

### (3) 会話が少なくなった

一緒に楽しむ趣味もなく、一緒に行動することもなくなってきましたと、当然のことですが、共通の話題は少なくなります。若い頃は、前記のとおり互いに異性としての存在感を感じていますし、肉体的関係などによって強く結ばれています。しかし、そういう関係が薄れてくる中高年の夫婦にとっては、会話は若い頃よりも二人を結びつける上では必要不可欠なものとなっているのです。まさに、中高年夫婦の絆となっているのです。

それが、中高年になって共通の話題がないために会話が途切れたり、「何十年も一緒にいるのだから、言わなくてもわかるだろう」などと高たかを括くくっていると、互いに存在感が薄れてしまい、その必要性を感じなくなるということになりかねません。

子育てに一生懸命の時期は、そのことが話題となります。孫ができますと、孫のことが話題となります。子育てが終わり、孫もいなかったり、いても遠くにいて会う機会が少ないという場合ですと、子や孫が話題の中心にならなくなってしまいます。経済的に苦しい時代は、夫婦で協力してその危機を乗り越えようと必死になります。それだけに話題も生まれてきます。中高年となって経済的にも恵まれてくると、その話題も少なくなります。

そうなってくると、いよいよ夫婦の話題が少なくなってきました。会話がなくなってきました。夫婦間に会話がなくなったら、何が中高年夫婦を結びつける絆となるのでしょうか。

そこで、これをどう乗り切るか、ということになります。意識的に共通の話題を見つけ、意識的に会話をするのだと思います。そのためには、「まず、相手の言葉に耳を傾ける」ことが何よりも大事だと思います。まず、「聞く耳を持つ」



ことではないでしょうか。孔子は、「六十にして<sup>みみした</sup>耳順がう」と言っています。人間ができてきたら、人の話をよく聞くようになる、という意味だと思います。中高年になったら、人の話を聞くようにならなければなりません。それは、まず夫婦間において実行すべきではないでしょうか。

#### (4)「無視された」と思うようになった

一緒に行動することが少なくなり、会話が少なくなると、「相手に無視された」と思い込むようになる方もいます。

時には、片方だけが「無視された」と思うだけではなく、夫も妻も互いに「無視された」と思い込むケースも見られます。私が感じたところでは、ほんのわずかなボタンの掛け違いがこのような思い込みを起こさせているのではないかと、いうケースが多くあります。自分の方から積極的に話しかけたり、行動を共にしたり、寝室を一緒にしたりするだけで、誤解が解けるケースではなかろうかと思われることがたびたびあります。「そっちがそのような態度を取るなら、こっちも無視してやる」ということになり、どんどん深みにはまっていくことになるケースが多いようです。

確かに、人間の心は極めてデリケートというか、微妙な問題がありますので、難しい面もあります。どうしても、「あっちがそうなら、こっちだって」という気持ちになりがちです。お互いにそういう気持ちになりますから、少しのボタンの掛け違いの溝がどんどん深まっていきます。意地の張り合いとなっていくます。

これを乗り切るためには、自分の方から歩み寄ることだと思います。一方が声を掛ければ、他方も応じます。<sup>やまびこ</sup>山彦のようなものです。このようにして解決できるケースが多く見られる気がします。少くく馬鹿になって、相手がどのような態度を取ろうと気にしないで、自分の方から歩み寄ることが大事ではないでしょうか。意地を張るのもほどほどにしなければ、本当に壊れてしまいます。



トホホ...

## (5) 「相手に好きな人ができたのではないか」と思うようになった

「相手に無視された」と思うようになった挙げ句、「相手に好きな人ができたのではないか」と疑うようになる方も少なくありません。こうなると、疑心暗鬼となります。つまり、一旦疑い出すと、何でもないことまで疑わしくなり、何も信じられなくなってきました。

ここまできますと、相手が憎たらしくなってきました。何もかもが気に食わなくなってきました。どんどん離婚目掛けて走り出します。

(1) 寝室を別にした → (2) 一緒に行動することが少なくなった → (3) 会話が少なくなった → (4) 「無視された」と思うようになった、という経過を経て、→ (5) 「相手に好きな人ができたのではないか」と思うようになってしまうと、もう疑心暗鬼が募り、止まらなくなるようです。

そうすると、共に乗り越えてきた苦勞の時代があったことも忘れ、楽しかった若い時代も忘れ、子供や孫がいることさえも忘れてしまったのかと思うような行動を取るようになります。そのような形で、中高年の方が私共の事務所に離婚相談を持ち込んでくるケースが少なくありません。

言いたい放題のことを申し上げましたが、離婚の危機などというものは、ほんのわずかなボタンの掛け違いから始まっていることが多いようです。わずかなところを改善すれば、関係は修復されます。そこは、何と云っても何十年という長きにわたって生活を共にし、苦樂を共にしてきた中高年夫婦です。

「最近どうも夫婦関係がしっくりしていない」という方がおられましたら、以上述べたことが当てはまっていないかどうか、胸に手を当てて考えてみてはいただけないでしょうか。

私共弁護士の仕事は、離婚裁判を担当していくらというものですが、壊すだけではなく、夫婦関係が円満に戻るようにすることも大事な仕事ではなからうかと、老いてきて考えるようになりました。



ふつうこそ ありがたいことと 知らされた

あの症状 この症状

平成24年11月18日

あおぞらうきよのすて  
青空浮世乃捨



普通でないことを体験し、普通であることのありがたさを知りました。

前に真っ直ぐ歩くことは、健常者は特に意識しなくてもできることです。前に真っ直ぐ歩くことは、健常者はごく当たり前にできています。こんなことは、健常者にとっては、普通のことなのです。ですから、健常者は前に歩けることを、「ありがたいことだ」などと思うことはないと思います。

私は、前に真っ直ぐ歩くことができなくなりました。病院の廊下をウォーキングしますと、どうしても体が右側に寄ってしまいます。廊下の右側の壁にぶつかってしまうのです。治療を受け、廊下を真っ直ぐ歩けるようになった時、「ありがたい」と心の底から思いました。

右手に力が入らず、右手で歯が磨けなくなりました。左手で磨こうとしましたが、なかなか上手くいきません。満70歳を迎え、初めて左手で歯を磨いてみたのですが、上手くいかず、イライラしてしまいました。

箸を上手く使えず、ベッドの上でご飯をボロボロこぼしてしまいました。おつかかずも上手く握めません。箸を左手に持ち替えてやってみましたが、これも上手くいきません。イライラしてきました。

病室のベッドで事務所に電話をし、裁判期日の打ち合わせをしましたが、裁判日誌に期日を書き入れようとしたところ、右手に力が入らず、字が書けませんでした。左手でボールペンを握ってみましたが、上手くいかず、ここでもイライラ



してしまいました。

右半身が麻痺<sup>まひ</sup>していたのです。それに気づいてから数日で症状はひどく悪化し、ウォーキング中、右側に寄ってしまうという段階を過ぎ、右足を引きずって数歩歩くのがやっと、という状態になってしまいました。ほとんど歩けない状態となりました。

頭の中に内出血が出現し、血液が脳の中に溜まったのだそうです。脳の左側に血液が溜まったので、体の右半身に麻痺が出たとのことでした。

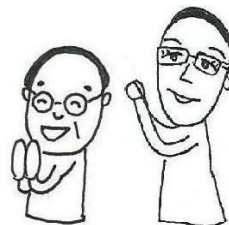
そのため、右足や右手に力が入らなくなりました。妻がその異常に最初に気がついたのは、私が廊下をウォーキングしている時でした。私の歩く姿を見ていた妻は、右肩が下がり、体全体が右側に傾いていることに気がつきました。子供達も、見舞いに来た際に私の歩く姿を見て、「体が右側に傾いている」としきりに気にしていました。

その後、数日で症状は悪化し、歯を磨くことも、箸を持つことも、字を書くこともできなくなり、ついには歩くこともできなくなりました。こんな状態が長く続いたら、どんなに辛い<sup>つら</sup>でしょうか。そのような症状に立ち向かっている方のことを考えると、居ても立っても居られない<sup>い</sup>気持ちになります。

東京女子医科大学病院において、硬膜下血腫除去手術を3回受けました。1回に120 ml位の血腫が除去されました。牛乳ビン3分の2本分くらいの量です。血腫が除去されると、嘘のように右半身の麻痺が消えました。脳外科で手術をし、その晩だけは脳外科の病棟に泊められましたが、翌朝には元の病室に戻りました。

朝8時頃に元の病室に戻ると、すぐに歯磨きをしました。右手に普段通りの力が入り、普段通りに歯が磨けました。「ありがたい」と感動しました。思わず「ありがとうございました」と独り言を<sup>つぶや</sup>かいていました。ただ普通に歯を磨けただけですが、嬉しくて嬉しくて感動しました。

すぐに朝食をいただきましたが、箸は普段通りに使えました。事務所に電話を



入れて、裁判の日程を日誌に書き入れましたが、普段通りに書くことができました。

その後、病院の廊下をウォーキングしましたが、私の後ろに付いて様子を確認していた妻が、「問題はない。正常だ」と、嬉しそうに声を出しました。

普通に歩けること、普通に歯を磨けること、普通に箸を使えること、普通に字が書けることがこんなに嬉しいことだとは思いませんでした。70年という長い人生においても、こんなに嬉しいことは滅多になく、心の底から感動しました。病室に戻ると、妻と「ありがたい」、「良かった」と言って握手を交わしました。

これまで、歩くこと、歯を磨くこと、箸を使うこと、字を書くことのどれを取っても普通にできていましたので、そのことが「ありがたい」などと思ったことはありませんでした。

しかし、そんなことができない症状が出現して、そういうことができなくなってみると、普通のことがどれほどありがたいことなのかを知らされました。

『患者とその妻の腎臓病体験記 第2巻 こんな症状が出た』を書き終えて、一句詠<sup>よ</sup>もうと考えました。ウォーキングしながら口から出てきたのが、「ふつうこそ ありがたいことと 知らされた あの症状 この症状」という一句です。

多くの症状が出ました。どの症状も、それぞれに辛く、ありがたいものではありませんでした。しかし、症状という普通ではない状態が出たお陰で、「普段当たり前と知っていることがありがたいことなのだ」と知らされました。

症状とは、心身の異常ですから、心身が普通とは違うということになります。普通とは違う体験を通して初めて、特別意識せずにやれていた普通のことがありがたいことであるということ、心の底から実感させられました。このことは、長い闘病生活を通して身に染<sup>し</sup>み込んできました。その思いが自然に口から出たのが、この拙<sup>つたな</sup>い一句です。



## ひやくぶん いっけん し 百聞は一見に如かず



「百回聞いても、一回見ることには及ばない」という意味だと思います。英語の世界でも同じような例えがあると、中学生の頃に教えてもらったような気がします。それは、「**Seeing is believing**」だったような気がします。もう60年近く前のことになりますので、間違っているかもしれません。そのまま日本語に直せば、「見ることは信ずることだ」ということになるのでしょうか。

これまで「元気になりました」ということをこの事務所便りや冊子などで、百回とはいきませんが、何度かお伝えして参りました。しかし、直接お目にかかった方以外には、元気な姿をお見せできずに今日に至っております。直接お目にかかった皆様からは、「顔色が良くなった」とか、「**元気溼刺**としている」とか、「若くなった」などと言っています。その度に嬉しくなり、舞い上がっています。

去る11月23日の『岩手日日』に、私達夫婦の写真が掲載されました。それを見た高校時代の同級生がその日の朝一番に、「ご夫妻の写真入りの新聞を見ました。若くて元気な様子のように嬉しく思う」というFAXを入れてくれました。嬉しくなりました。

写真ですから、実物ではありませんので「**一見**」と言えるかどうかは疑問ですが、写真は文字通り「**真**を写す」わけですから、一見に近い気もします。そこで、直接お目にかかっていない皆様に、この写真を流用しようと考えつきました。

老いぼれたわが姿を晒している写真ですから、恥ずかしいという思いもありますが、この姿が最も現在の自分の姿を正直に伝えるものであることは間違いのないと思います。

記事は、『岩手日日』の鎌田寛樹氏が書いてくれました。取材に来られた時にも、「よく勉強している」という印象を受けました。一緒に取材を受けた妻と、「よく私達の駄文に目を通してきている」、「他の文献にも相当目を通してきている」、「腎臓病の基礎知識も確かだ」などと話し、驚いたり、感心したりしました。

こんな風に事前に十分に勉強なされた上で取材していただくと、気持ちよく取材に応じることができます。まだ若い新聞記者さんですが、教えられることが多くありました。記事の内容も私達が述べたいことを要領よく伝えてくれており、満足していますし、感謝もしています。

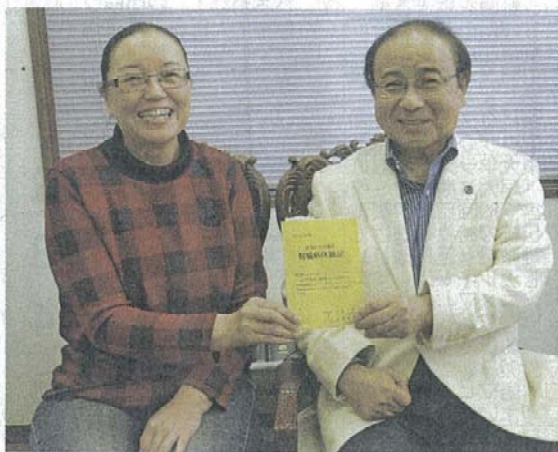
その記事の最後に、『病と健康を通して感じた死生観などもつづりたい』と、意欲的に執筆に当たっている」と書かれていました。「意欲的」かどうかは定かではありませんが、「楽しんでる」ことは間違いありません。特に、死生観については思うところが多くあります。死んでもおかしくないと思われる状態を体験し、「どう死ぬべきか」を考えさせられました。その結果、「残された時間をどう生きるべきか」を考えさせられることになりました。

このように紹介してもらい、もう逃げられないと覚悟を決めました。このシリーズの最後に、「人間はどう死ぬべきか。そのためにはどう生き抜くべきか」について述べてみたいと決心しました。未熟な身を省みず、このような大言壮語を吐くことは恥ずべきことですが、それでも言っ<sup>は</sup>て自分を奮<sup>ふる</sup>い立たせなければ、やれるテーマではありません。「相変わらず身の程を知らない奴」と思われそうですが、これからも懲りずに挑戦してみたいと思いますので、お付き合い下さるようお願い申し上げます。

生体腎移植手術を受けた一関市宇相去の弁護士千田實さん(70)と、提供者の妻加代子さん(55)は、闘病生活を振り返る「患者とその妻の腎臓病体験記」を執筆している。腎不全の原因となった生活習慣病に始まり、これまでの治療の足

跡を全7巻にまとめる。出版を前に、経過を要約したダイジェスト版を発行。2人は「多くの人、社会の支えで生き返らせてもらったことへの恩返し。病気で苦しむ方に参考にしていいただきたい」と話している。

## 夫婦で闘病 一冊に



患者とその妻の腎臓病体験記ダイジェスト版を発行した千田實さん(右)と加代子さん

### 一関・千田 弁護士 腎臓病治療の経過知って

を始めたが2004年に11年から人工透析を開始、慢性腎不全を併発し、翌年、人工透析が必要と手術を受けた。

田舎弁護士(いなべ) 告された。その後は腎臓病治療のスター「腎臓病治療のスター」を自称する實さんは、能の低下を少しでも遅らトからゴールまでを体験 ストと共に随所に盛り込1984年、糖尿病と高 せようと、加代子さんのした」2人は、病院関係 まれている。血圧症を発症。薬物療法 協力で食事療法を導入。 者や周囲の支えへの感謝 本編は▽「大事なこと

を込め、闘病記」の出版 を知らなかった(1巻)を決定。これに先駆け、▽「こんな症状が出た」治療生活のアウトライン(2巻)「などで構成すを分かりやすく示すダイジェスト版を発刊した。ダイジェスト版はB6判、104頁。30年間にわたる薬物療法の効果や問題点から、試行錯誤を重ねた食事療法、東日本大震災直後に始め、慢性硬膜下血腫に見舞われた人工透析、腎移植手術の経過や結果までを實さん、加代子さんがそれぞれ視点をつづった。「米旨し 野菜も旨しダイエット」「腎臓を握提供する」と言いつづ7年経って「一心同体」など、實さんが「青空浮世乃捨」のペンネームで

「自分の臓器を提供する」として、主人が社会に貢献できれば」と、移植を申し出た加代子さん。その思いに感謝する實さんは「腎不全に限らず、あらゆる病気との向き合い方、病と健康を通して感じた死生観などもつづりたい」と、意欲的に執筆に当たっている。

ダイジェスト版は1冊500円で販売中。問い合わせは、みのる法律事務所0191(23)896011へ。

平成24年(2012年) 11月23日(金)